



## 神戸大学におけるFACEDUO活用事例 -感情認知トレーニングVR&認知症ケア支援VR-



神戸大学では、児童思春期から老年期精神疾患など、幅広く診療しており、認知症センターや児童思春期・AYA世代こころの総合診療センターのほか、ショートケアにおける精神科リハビリテーションにも力を入れています。

### 待ち時間を有効利用した、本人と家族への支援

認知症ケア支援プログラム

認知症センターでは、ご家族や支援者向けの体験ツールとして、FACEDUOを積極的に活用しています。心理検査、点滴治療中の待ち時間など、日常診療の中で体験できる形を取り入れており、反応は非常に良好です。ご家族に「体験してみませんか？」と声をかけるきっかけが生まれ、体験を通じた学びの中で、対応の工夫についての意見を聞かせていただき、支援者自身も学ばせていただくことがあります。その他、家族会でも認知症ケア支援プログラムの動画を見ていただいた後、グループで意見交換をし、互いに対応方法を学ぶことができます。体験者は、ご家族、若年から高齢の認知症に携る支援者など多岐にわたり、活用の輪が広がっています。

#### ご家族の声

「本人の気持ちが分かった」「症状への理解が深まった」「対応方法が分かりやすい」

「本人の立場で介護を考えられるようになった」といった声が多く寄せられています。

#### 支援者の声

「初めての方でも体験しやすい」「若年性認知症の家族にも響く内容」「自分自身の学びにもなる」と評価されています。



家族会の場面



# 「相手の感情がわかる！」を支援する難しさをVRで

感情認知プログラム

社会認知の領域は「相手の気持ちを推測する」「場の空気を読む」など、明確な正解が存在しないスキルが多いことから、支援者のスキルや利用者に課題感をもって取り組んでもらう難しさがありました。また、現実場面への一般化が難しく、プログラム内では理解できても、実生活では使えない、緊張すると元に戻ってしまう、相手が変わるとうまくいかないという課題もありました。近年は、児童思春期・AYA世代こころの総合診療センターから発達障害のある方のショートケアへの紹介が増えており、従来の支援に加えて新たなアプローチやプログラムが求められていました。FACEDUOの感情認知プログラムは、VRで映像を通して現実に近い対人場面を体験しながら学べるため、表情・感情認知の実践的なトレーニングが可能です。認知機能の維持・向上に加え、感情を読み解く力を育てられること、本人支援だけでなく家族や支援者への教育にも活用できる点を評価しています。VRへの関心の高さにより、当院の児童思春期・AYA世代外来に通院している、ASD傾向が強い若い世代にも受け入れられています。

(教授 菱本 明豊 医師)



## 日常生活におけるコミュニケーションスキルの変化

ショートケアでは現在、週1回1時間、FACEDUOの「感情認知トレーニング」をグループ形式で実施しています。対象は、統合失調症や知的障害、発達障害など多様で、利用者の背景もさまざまです。プログラムはマニュアルに沿いながら、前回の振り返りや近況確認を行った上で、映像を視聴しながら意見交換を進めます。



ショートケアプログラムの様子

### 利用者の変化 ～感情を“一步引いて”見られるように～

- 相手の感情をそのまま受け取るのではなく、状況と感情を客観的にとらえられるようになった
- 一步引いて考えられるようになった
- まず共感することの大切さを実感した
- 旦那の機嫌が悪い時、まず相手の気持ちを理解しようと思えた
- 普段使わない言い回しを学び、違う場面で使ってみようと思えた



SCITも実施していましたが、表情認知を言葉で伝える難しさがありました。FACEDUOでは、「リアルな動画の方が分かりやすい」「状況を具体的に想像しやすい」といった声もあり、映像教材の強みが活かされています。また、プログラム運営において、スタッフのリソース軽減にもつながっています。個別での実施や進め方の工夫により、さらなる活用の広がりが期待されています。

今回の取り組みから、FACEDUOは感情理解の基礎を身につける「入り口」として有効であり、より実践的なコミュニケーション支援につながる可能性が広がっています。



OT西村様 MSW下村様

詳しくは公式サイトにて

faceduo

検索

販売 Otsuka

開発・製造

JOLLY GOOD!

2026年5月作成  
FD2605001